現代にいきづく心と技

[土と炎の芸術　会津本郷焼]

会津本郷焼の起こりは古く文禄二年(1593)に蒲生氏郷公が、若松城の城郭を修理の折、播磨国(兵庫県)から瓦工を呼び寄せ、屋根瓦を焼かせたのが始まりといわれています。

陶器においては、保科正之公が正保二年(1645)尾張国瀬戸(愛知県)出身の陶工を招いて本格的な近世陶器の製造が開始されました。また、寛政十二年(1800)には白磁(磁器)製法も開始され、現代につづく会津本郷焼の基盤を作り上げたのです。

会津本郷焼には、陶器、磁器の両方があり、一窯元で両方製造しているところもあります。

このことは、全国的に見ても珍しい産地構成といわれております。

陶器は、伝統的な色釉を基盤とし、素朴で暖かみのある作品が多く見られます。磁器は手描きで山水文・花鳥文の呉須絵が多く、優雅な青華紋様が陶器とはまた違った歴史を感じさせます。

毎年八月第一日曜日には、町内瀬戸町通りにおいて、午前四時から正午まで「会津本郷せと市」が開催され、夏の風物詩となっています。当日は県内外から六万人を超す焼物の愛好家が集まり、大いに賑わいます。